一なかよくして、たすけあう【友情、信頼　B（9）】

モチャロク　と　じゅうたろう

【モチャロクの写真】

わたしたちが　すむ　この土地には、むかしから　たくさんの　アイヌの　人たちが、サケや　シカを　とり、しょくぶつを　つかって　生活していました。

今から　百五十年い上前、本しゅうから　人が　たくさんきて、この土地を　「北海道」と　よぶことにしました。そして、森や林の　木を切り、町や　道ろ、はたけを　つくりました。これを、「かいたく」と言います。

アイヌの　人たちは、もともと　すんでいた土地を　「わ人」（本しゅうから　きた人）に　とりあげられ、長い間　つづけてきた、　耳かざりや、サケを　とることを　「やっては　いけない」、「かえなさい」、「わ人と、同じように　しなさい」と、めいれい　されました。

明じ十五年（一八八二年）、すずき　じゅうたろうという　わ人の　わかものが、よこはまから、帯広に　やってきました。じゅうたろうは、一人ぼっちで　はたけを　つくり、「かいたく」をしました。そして、さむい　さむい　十勝の　冬を、生まれて　はじめて　すごしました。

そんな　じゅうたろうの生活と、さびしい心を　たすけたのは、アイヌの　リーダーの　モチャロクと　なかまたちでした。モチャロクは、じゅうたろうの　ことを、いつも　心ぱいして　サケや　シカ　肉などの、食べものを　あげました。じゅうたろうも　おれいに　ごはんを　ごちそうしたり、おさけを　いっしょに　のんだりして、なかよくしました。じゅうたろうに　高いねつが　出たときも、たすけてくれたのは、アイヌの　人たちでした。

春になり、本しゅうから　じゅうたろうの　なかまがきて、「かいたく」が　はじまりました。

ある日　はたけを　作るため、なかまの　わ人が、草に　火を　つけました。火は、あっというま

に　広がって、アイヌの　人たちの　そうこが、やけてしまいました。

「わ人は、かってに　わたしたちの　土地にきて、こんどは　家までも、やいてしまった！」

アイヌの　人たちは、おこったり、こわがったりして、みんな　どこかへ　行ってしまいましたが　モチャロクの　一家だけが　のこっていました。じゅうたろうは、なかまと　いっしょに　たくさんのお米と　おさけを　もって　モチャロクの　ところへ　あやまりに　行きました。

しばらくして、わ人に「サケを　とっては　いけない」と　きめられた　アイヌの　人たちは、食べるものが　たりなくなって、こまって　しまいました。じゅうたろうは、アイヌの　人たちをたすけるために、野さいのたねを　あげて　はたけの　つくりかたを　教えました。

じゅうたろうは、コカトアンという　アイヌの女せいと　けっこんしてからも　ときどき　モチャロクに　あいにいって、いっしょに　おさけを　のみ、「かいたく」の　大へんさについて　なきながら、語りました。アイヌの　人たちも　いっしょに、なみだを　ながしました。

「パラパラ・ニシパ（なきべそだんな）」

いつのまにか　じゅうたろうは、アイヌ語のあだ名で　みんなから、よばれるように　なりました。

「この土地に　もともと　すんでいた　アイヌの人たちと、たすけあって　生きていく。」

そう　心にきめ、じゅうたろうは　いつまでも　いつまでも　モチャロクや　アイヌの　人たちと　なかよくくらしました。

【すずき　じゅうたろうの写真】

◎　アイヌの　人たちの　そうこが　もえた　あと、なぜ、モチャロクの　一家だけが　のこって　いたのでしょうか。

◆　「ともだちって　いいな」と　おもった　ことは　ありますか。それは　どんな　ときですか。